

(3) 各教科でのアクティブラーニング

<国語>

実施科目名	実施学年・組	実施時期・期間	実践者名
国語	高校3年(文系クラス)	センター終了後(2月)	武田
<p>単元：言語に親しむ活動</p> <p>内容：投書を書く</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世間の出来事や自分の生き方・将来などを見つめ直し、300字～400字の短い文章にまとめる。 <p>目的：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己の考えを、短い文章の中での的確に表現する。 ・世の中の出来事に対して関心を持ち、他人事ではなく、また、一般論ではない自分なりの考えを深める。 <p>反応：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・取り組む前に新聞を読ませ、世間の出来事についての自分の考えを深める時間をとった。生徒たちは最初苦戦していたが、徐々に取り組みが良くなっていった。 ・提出された投書にコメントをつけて返却した。また、良作はところ、その後に提出された投書の多くに内容の深まりが見られた。 <p>効果：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初めは苦戦していた生徒たちだったが、回数を重ねるごとに目に見えて取り組みが良くなっていった。自分の思いや意見を深め、それを文字に表出するという作業は、進学後にも繋がる学びになったように思われる。 ・投書を下野新聞社に送り、実際に掲載された生徒が10名程度出た。生徒たちは自分たちの文章が新聞に掲載されたことに新鮮な驚きを感じていたようだった。これを機に、新聞や活字(紙媒体)の文章への関心が高まることを期待したい。 			

実施科目名	実施学年・組	実施時期・期間	実践者名
国語	中学2年1・2・3組	12月・6時間	石塚 弘幸
<p>単元：</p> <p>6 描写を味わう 『走れメロス』</p> <p>内容：</p> <p>『走れメロス』の本文の内容をもとに議論をする。</p> <p>これまで文学作品を扱う授業では内容の解釈を吟味するような授業を多く展開してきた。今回は作品を客観的に分析し、作品中の描写や表現が作品中にどのような効果があるのかを中心に授業を実施した。また、課題を『『走れメロス』はシリアスなのか、コメディナーなのか』という課題を解決するために、5つの観点から分析することを試みた。</p> <p>その際、知識構成型ジグソー法を用い、それぞれのグループで分析した内容を関連付けて自分の意見を持たせる工夫をした。また、自分の意見をさらに深めるために、ワールドカフェ方式を使い、さらにクラス内で班での内容を共有した。</p>			

最後には課題に基づいた意見作文を書くことで、自分の考えを表出し、さらに読み合うことでよりお互いの考えを共有することができた。

目的：

答えのないものに対してある一定の答えを導き出すことは、これからのグローバル社会を生きる生徒たちにとっては大切な能力と言える。また、個の思考を表出し、聞き合いさらに深め、課題に対して自ら判断し、その理由を述べる力を養うことが大切であるとも言えるだろう。

これらの能力を培うためには答えに多様さがある文学作品が最適であると考え、今回の授業をコーディネートした。

反応：

文学作品という多様な答えが期待できる授業だからこそ、作品を客観的に分析し、課題に迫る作業を進めることで、生徒同士が積極的に議論し合う姿が見られた。

効果：

繰り返し議論をしながら課題を解決するような授業を実践することで、自分だけの考えにとどまらず、他者の意見を受け入れながら合意を形成する力を育成することができると言えるだろう。

実施科目名	実施学年・組	実施時期・期間	実践者名
国語	中学1年全クラス	10月・5時間	毛塚 雅子

単元：伝統文化に触れる 「竹取物語」 (東京書籍 国語1)

内容：『竹取物語』が千年以上も読みつがれてきたのはなぜだろう」という課題を設定

し、古典作品としての「竹取物語」の魅力を考えさせる授業を展開した。方法としては、まず初めに自分で考え、その後グループで議論し、さらにワールドカフェ方式を用いて他グループとの意見交換を行い、互いに交流することで自分の考えを深めさせた。そして、最後に改めて「『竹取物語』の面白さや魅力」について文章にまとめることで、自分の考えの広がりや深まりを自覚させる機会とした。

目的：「『竹取物語』が長く読み継がれているのはなぜか」を問うことで、様々な古典の説話の中でも、長く伝承されてきた「竹取物語」が、どうしてここまで人々の心をひきつけるのかを考えることにより、生徒一人一人が主体的かつ意欲的に、物語の面白さや魅力を見付けることができるものと考えた。

また自分の考えを持ち、それを友達同士紹介し合って意見の交流を図る中で、一人での読みでは気付かなかったことに気付いたり、自分と友達の考えを比較し共通点や相違点を見つけたりすることができ、個々の読みの深まりと、生徒同士の学び合い・高め合いが期待できるのではないかと考えた。さらにそこでの発見をもとに自分の考えを再形成し、文章にまとめる活動を設定することで、自分の考えの広がりや深まりを自覚させたいと考えた。

反応：今まで単なる昔話として捉えていた「かぐや姫」の物語が、現代の人間の生き方や考え方に通ずるものがあることを知り、古典作品としての面白さに気づいたことで、興味・関心を持ち、たいへん意欲的に作品の分析を行っていた。また、自分が見つけた「竹取物語」の魅力を伝え、その後友達と意見の交流をし、さらに自分の考えを再形成するという活動を通して、他者と交流することの楽しさを実感することができたようだ。

効果：単元の最後に「自分が考える『竹取物語』の魅力」について作文を書くことで、自分の考えの広がりや深まりを自覚することができた。ほとんどの生徒は、根拠を明確にして書いており、また、内容的にもグループのメンバーや他グループとの意見の交流を踏まえた広がりが見られた。さらに、生徒の感想から「もっと知りたい」「他の作品も読んでみたい」という記述が多く見られ、古典文学への興味関心の高まりが感じられた。

『走れメロス』の本文の内容をもとに議論をする。

これまで文学作品を扱う授業では内容の解釈を吟味するような授業を多く展開してきた。今回は作品を客観的に分析し、作品中の描写や表現が作品中にどのような効果があるのかを中心に授業を実施した。また、課題を『『走れメロス』はシリアスなのか、コメディナーなのか』という課題を解決するために、5つの観点から分析することを試みた。

その際、知識構成型ジグソー法を用い、それぞれのグループで分析した内容を関連付けて自分の意見を持たせる工夫をした。また、自分の意見をさらに深めるために、ワールドカフェ方式を使い、さらにクラス内で班での内容を共有した。

最後には課題に基づいた意見作文を書くことで、自分の考えを表出し、さらに読み合うことでよりお互いの考えを共有することができた。

目的：

答えのないものに対してある一定の答えを導き出すことは、これからのグローバル社会を生きる生徒たちにとっては大切な能力と言える。また、個の思考を表出し、聞き合いさらに深め、課題に対して自ら判断し、その理由を述べる力を養うことが大切であるとも言えるだろう。

これらの能力を培うためには答えに多様さがある文学作品が最適であると考え、今回の授業をコーディネートした。

反応：

文学作品という多様な答えが期待できる授業だからこそ、作品を客観的に分析し、課題に迫る作業を進めることで、生徒同士が積極的に議論し合う姿が見られた。

効果：

繰り返し議論をしながら課題を解決するような授業を実践することで、自分だけの考えにとどまらず、他者の意見を受け入れながら合意を形成する力を育成できると言えるだろう。

<地歴・公民>

実施科目名	実施学年・組	実施時期・期間	実践者名
現代社会	高校1年 全クラス	通年	島田 佐智夫
内容：3分間スピーチ 授業開始時に担当となった1名の生徒が新聞記事を1つ以上取り上げ、その内容を簡潔に紹介して自分の考えを述べる。それに対して他の生徒が質疑等を行う。			
目的：新聞に目を通させることで社会の出来事に関心を持たせる。また、記事の要約や自分の意見をまとめること、発表生徒への反論などを通して思考力、判断力、表現力の育成を図る。			

反応：毎回ではないにしても、発表に対して質問、反論を行う生徒が見られた。定期考査に時事問題を毎回出題することを告知したこともあり、生徒たちは真剣に発表を聞いていた。

効果：3分間スピーチを通じて、授業内では自分の意見や疑問を積極的に主張できるという雰囲気作りを行うことができた。また、発表に関連した説明を教師が付け加えていくことで、授業内容と社会で起きている出来事のつながりを意識させることができた。

実施科目名	実施学年・組	実施時期・期間	実践者名
現代社会	高校1年 全クラス	4月	島田 佐智夫
<p>単元：地球環境問題「持続可能な社会を目指して」</p> <p>内容：地球環境問題の単元のまとめとして、これからの世界的取り組みとして先進国、新興国、途上国の行うべきことを考える。また、個人としてどのような取り組みが問題の改善に有効か、現実的に実現可能かを考え、グループで話し合い、発表する。</p> <p>目的：地球環境問題を知的理解に留まらず、現代を生きる我々自身の問題として考えさせ、グループディスカッションと発表を通じて多様な意見が存在することを実感させる。</p> <p>反応：グループディスカッションでは多様な意見が交わされ、予想以上に白熱した議論が交わされたクラスもあった。また、実現可能で効果的な個人の取り組みの難しさに気づいた生徒が多かった。</p> <p>効果：最初の単元のディスカッション・発表であったが、グループで協力して活動が円滑に進んだ。また、「現代社会」の授業では、自分の頭で考えることが求められるということを生徒に意識付けられた。</p>			

実施科目名	実施学年・組	実施時期・期間	実践者名
現代社会	高校1年 全クラス	5月	島田 佐智夫
<p>単元：政治参加と民主政治の課題「政党の役割」</p> <p>日本経済の進展と変化「戦後日本経済のあゆみ」</p> <p>内容：平成とはどのような時代だったか</p> <p>令和への改元があったため、平成の政治、経済、スポーツ、流行、技術など、各生徒の興味のある分野についてレポートをGWの課題として課した。それを用いてワールドカフェ方式で発表を行わせた。</p> <p>目的：平成の政治・経済について興味を持たせ、社会では様々な分野が複雑に結びついていることを理解させる。</p> <p>反応：他の生徒の様々な分野に関する発表を聞き、政治・経済をはじめとした社会全般に関する興味関心が高まったようであった。</p> <p>効果：最後に平成の国内外の政治・経済についての確認の授業を行い、中学校での既習事項についての理解を深めることもできた。</p>			

実施科目名	実施学年・組	実施時期・期間	実践者名
現代社会	高校1年 全クラス	6月	島田 佐智夫
<p>単元：資源・エネルギー問題「食料・水問題」</p> <p>内容：SDGsの実現可能性ランキング</p> <p>SDGsの17の目標を実現しやすい順番に目標を並び替え、そのための具体的な方策をグループで考えて発表する。</p> <p>目的：SDGsの17の目標を吟味することで、単なる知識としてではなく世界的に取り組むべき課題を身近な問題として捉えさせる。また、自分にできることについても考えさせる。</p> <p>反応：目標が抽象的な理念であるために、世界の現状と課題とをイメージできない生徒にとっては具体的方策を考えることが難しい内容ではあったが、多くのグループではリーダー的な役割を果たす生徒が中心となって話し合いが進んでいた。</p> <p>効果：生徒たちはSDGsの重要性を理解するだけでなく、他のグループの発表を聞くことで、世界の状況や課題についても視野を広げることができた様子であった。</p>			

実施科目名	実施学年・組	実施時期・期間	実践者名
現代社会	高校1年 全クラス	7月	島田 佐智夫
<p>単元：科学技術の発達と生命「さまざまな医療技術と先端医療」</p> <p>内容：臓器提供、生殖医療、死のあり方について考える</p> <p>目的：授業で扱った内容を自己に関わる問題として捉えさせ、他の生徒の意見を参考に自らの生き方あり方について考えさせる。</p> <p>反応：これまで生徒たちが考えたことのないような内容だったために、個人では考えが深まらない生徒が多かったが、グループでの話し合いを通じて考えが深まった様子であった。</p> <p>効果：自らの生き方や生命について考えさせることができた。特に改正臓器移植法の内容を理解し、臓器提供意思表示カード（ドナーカード）などで意思表示をすることの重要性を感じた生徒が多いようであった。</p>			

実施科目名	実施学年・組	実施時期・期間	実践者名
現代社会	高校1年 全クラス	10月	島田 佐智夫
<p>単元：日本国憲法と基本的人権「明治憲法と日本国憲法」</p> <p>内容：日本国憲法一气読み</p> <p>憲法の条文をすべて目を通し、特に重要だと考える条文を3つ選びその理由を挙げる。また、改正が必要だと思う条文や内容があればそれについても挙げる。その後、グループで意見を交換させ、グループの総意を発表させる。</p> <p>目的：憲法の内容を概観・把握させる。また、憲法を身近なものとして捉えさせるとともに、合意形成の重要さと難しさに気づかせ、主権者になるという意識を高めさせる。</p> <p>反応：中学校の段階では憲法の条文は特定のものしか触れていないために、多くの生徒が興味深く憲法</p>			

の条文と向かい合っていた。また、グループワークでは白熱した議論が行われたところもみられた。

効果：その後の単元で憲法に関わる内容では、一度自分で憲法に当たったことがあったためか、生徒の理解が早かった印象を受けた。また、憲法を通して、日本社会の課題についても考えさせることができた。

実施科目名	実施学年・組	実施時期・期間	実践者名
倫理	高校3年2組	9月	島田 佐智夫
<p>単元：人間の尊厳の根拠を求めて「経験論と合理論の対話」</p> <p>内容：この世界は存在するのかもしれないのか</p> <p>経験論と合理論を学ぶにあたって、世界が存在するのかもしれないのか、その理由とともに考えさせ、他の生徒と意見交換・発表を行った。その際に、考えるヒントとして、映画『マトリックス』の世界観を提示した。</p> <p>目的：先哲の思想をよく理解する生徒は多いクラスであったが、それに対して自分の意見を求められると回答に窮する生徒が多かった。そこで、より深く先哲の思想を理解するためにも、自分のスタンスを定めさせてから思想家と向かい合わせるために導入として行った。</p> <p>反応：存在論と認識論の区別も提示せずに、課題のみを提示したので、多種多様な意見が出た。また、中にはこんなことを考え何になるのかという生徒もいたが、多くの生徒は、今までに考えたこともないような課題に悩みながらも取り組んでいた。</p> <p>効果：その後の授業では、イギリス経験論、大陸合理論、ドイツ観念論のどの思想家の考え方と自分の考え方が近いのかという視点から、抽象的で難解な分野ではあるが、興味を持って授業に臨んだ生徒も一定数みられた。</p>			

実施科目名	実施学年・組	実施時期・期間	実践者名
社会	中学3年1組	10月	長 秀和
<p>単元：司法権の独立と裁判</p> <p>内容：前半：教室を法廷として模擬裁判を行う。</p> <p>中盤：裁判を振り返り、個人さらに班で判決を考える。</p> <p>後半：裁判員裁判の意義について考える。</p> <p>目的：裁判員裁判のしくみを知り、根拠をもって判決を考えることができる。</p> <p>裁判員裁判の意義を考える。</p> <p>反応：裁判官・検察官・弁護士・被告人・証人等の配役に当たった生徒はもちろん、傍聴人として模擬裁判に参加した生徒も、後半に裁判員として判決を考える場面では積極的に意見を出し合っている様子があった。</p> <p>効果：普段の授業では挙手して意見を言うことが苦手な生徒にとっても、班の中でであれば意見を交換することができたり、友だちの意見を聞いて自分の考えを深めたりすることができたと考える。</p>			

実施科目名	実施学年・組	実施時期・期間	実践者名
中1 社会	中学1年1組	10月25日	高野 誉士夫
<p>単元：中世 武士の世の始まり（歴史的分野）</p> <p>学習課題：承久の乱は、鎌倉幕府にどのような影響を与えたのか。</p> <p>内容：①2つの資料「後鳥羽上皇の院宣」「北条義時・泰時父子の会話」をもとに、承久の乱において御家人の立場から朝廷方・幕府方のどちらに従うか、自分の考えをまとめ、個別の意見交流を行う。</p> <p>②資料「北条政子の訴え」をもとに、御家人の立場から朝廷方・幕府方のどちらに従うか、再度自分の考えをまとめ、グループで話し合い、発表し合う。</p> <p>③承久の乱で幕府方が勝利したことにより、幕府の支配が西国に広がったことをとらえる。</p> <p>目的：①承久の乱において、御家人の立場から、幕府と朝廷の関係や将軍と御家人の関係をふり返り、当時の社会状況やこの乱が社会に与えた影響について考えることができる。</p> <p>②承久の乱における御家人の行動の考察を通して、朝廷と幕府の二重支配の様子と、その後の幕府の力の拡大について理解する。</p> <p>反応：生徒の興味・関心がある課題・資料を提示したことで、生徒による話し合い活動が活発になった。また、授業の中で歴史の当事者の立場を設定したことと、時代の分岐点となる事象やある種ジレンマ教材を取り入れたことで、生徒の主体的な活動を促し、生徒の思考過程を高まっていた。</p> <p>効果：個人の活動、グループでの活動と段階を踏んだことで、自分との対話、生徒同士の対話の中で、自分の考えを根拠をもって、表現することができた。さらに、生徒の学習への深まりが見られた。</p>			

<数学>

実施科目名	実施学年・組	実施時期・期間	実践者名
数学 I A	高校1年4組	5～2月	戸田圭一
<p>単元： 数学 I A</p> <p>内容： 節末問題でのグループ・ペアワークによるアクティブラーニング</p> <p>節末問題の難問について、一人で解くのではなく、分かっている生徒は、近くの分からない生徒に教え、分からない生徒は、分かっている生徒に教えてもらう形式をとり、教員から教授されるのではなく、生徒同士の能動的な学びの時間をとった。</p> <p>目的： 分かっている生徒は、教員からの教授では分かったふりをして、内容が身につかないので、教員ではなく、生徒同士での教授であれば、分からないことを分からないと正直に伝えるので、内容が身につく。</p> <p>反応： 教員からの教授も聞きやすいという声があった。</p> <p>単元に向かうまでの授業も、聞く姿勢があがった。</p> <p>効果： 数学が中学校では分からなかったところが、分かるようになったという生徒の変容が見られた。積極的に教える、積極的に聞くという姿勢が現れ、教員からの教授よりも効果が高いことがうかがえる。</p>			

実施科目名	実施学年・組	実施時期・期間	実践者名
グローバル情報	高校1年2～4組	2学期	石川 美恵子
単元：情報社会 内容：中1プロジェクト 目的：4人1グループで、スマホ、SNSの賢い使い方を中1にプレゼンする。 反応：身近な内容なのでよく調べ、話し合いながらスライドの作成をし、発表も分担して行っていた。 効果：調べていく中で、改めてネットの「光と陰」を意識するようになるとともに、協同作業ができるようになった。			

実施科目名	実施学年・組	実施時期・期間	実践者名
中1 数学	中学1年1組	10/28	星野 淑子
単元：比例と反比例 内容：比例の活用 学習課題 ともやさんとけんたさんは、河川敷のジョギングコースで鉄橋から公園までの2400mを走った。出発してからx分後の鉄橋からの道のりをymとして、2人の進んだようすを表すグラフを見て、次のことをグループで考え、その求め方も説明しなさい。 (1) 2人の分速を求めなさい。 (2) 公園にはどちらが何分先につくか。 (3) 2人が350m離れるのは何分後か。 目的：関数は表・式・グラフを使って表せる。グラフで表れている関係を、表や式に表すことで、関数関係を適切に把握することができる。 反応： 3～4人のグループで協力しながら課題解決に取り組むことで、いろいろな考えを出し合って学習する様子が見られた。課題によっては表・式・グラフのうちどれを利用したら簡単に解決できるかを議論し合っている様子も見られた。グループごとにホワイトボードに解答を書き、考えを説明することもできた。 効果： 関数関係は表・式・グラフで表現できることの理解がすすみ、課題によって適切な方法で解決することがわかった。また、考え方を説明することができた。			

<理科>

実施科目名	実施学年・組	実施時期・期間	実践者名
生物	高校1年1組	6月	清水 紘治
<p>単元：細胞</p> <p>内容：体細胞分裂の観察</p> <p>本時の学習は、中学ですでに学習している細胞についての知識をさらに深めるものであった。</p> <p>実際に実験でニンニクの根を用い、固定、解離、染色、押しつぶしの4工程の確認を行い、生徒自身が実践をした。そして体細胞分裂の前期、中期、後期、終期の4つの時期を顕微鏡でしっかりと確認する作業を行った。その際、班を飛び越えて色々な班の観察物を観察するよう促し、自分の班で作成した試料と他の班で作成した試料の出来具合を判定しあうようにした。</p> <p>目的：植物の根端分裂組織で体細胞分裂している細胞を見つけ、各時期の特徴を確認することにより体細胞分裂の過程を理解する。</p> <p>反応：協力しながら実験を行うことができ、体細胞分裂の観察に全ての班が成功した。ただし見え方については班によって異なったため、班を飛び越えた意見の出し合いがあった。</p> <p>効果：染色の時間や実験の効率化など、生徒同士がよく協力してよく話し合い考えていた。回収したプリントの感想を見ると、実験をしたことにより知らなかったことを知ることができて良かったなど、全員が好意的な反応であった。このことから、実験によって視覚に訴えることの大切さが実証できたと感じる。</p>			

実施科目名	実施学年・組	実施時期・期間	実践者名
理科	中学全学年	2年間	理科担当者(神戸・中村)

内容：以下の3つの仮説を実証すべく、授業実践を行った。


【仮説1】 見通しを持たせて予想や仮説を充実させて実験や観察を行うことにより、課題意識を強く持つことができ、根拠を確実にした自分の考えを高めることができるのではないかな。

【仮説2】 観察や実験の技能を確実に身に付けることによって、正確な観察・実験ができ、信憑性のある結果をえることや、ICT機器を活用した結果の整理や現象を繰り返し確認することにより、考察の充実が図られ、科学的な思考力の育成が図れるのではないかな。

【仮説3】 効果的な思考ツールや意見をまとめることのできるホワイトボードなど、個の意見を共有できる教具の活用により、話し合いの充実が図られ、協働的な学びが深まるのではないかな。

目的：自他の意見を比較したり関連付けたりすることによって、見通しをもって問題を解決することができるコミュニケーション力を高め、協働的に学ぶことの有用性を実感しながら主体的に学習に取り組む資質・能力の育成を目指す。

反応：〔生徒へのアンケート調査の結果より〕



ICT機器を使用した実験操作の説明について、生徒アンケートから、約92%の生徒が『とてもよい』と回答していた。正しい実験操作の習得により、その後の考察の深まりを実感する生徒が多く見られた。

〔生徒の授業評価より〕

・『屋台形式』での発表で、各班の意見を聞いて、自分の班からは出てこなかった意見や考えを知ることができてとてもよかった。
(ホワイトボードを使用)

・いろいろな班のまとめ方を見たり、発表を聞いたりして、とても参考になった。
(コラボノート、ホワイトボード、大型テレビを使用)

効果：今回の『協働的学びの確立』を目指す授業実践を通して、生徒によりよい変容が見られた。また、一人一人の良さを認め合う雰囲気が高まり、人間関係の構築につながった。それによって、主体的に学びに向かう集団が形成されていることを実感できた。



<保健体育>

実施科目名	実施学年・組	実施時期・期間	実践者名
保健	高校1年全クラス	通年	川田・古川
<p>内容：教科書を用いて、1年次に取り扱う領域を10分野に分類。生徒も10グループに分け、1グループが1分野を選択、書籍やインターネット等を用い調査・探究・協議をする。学習した分野について40分程度の発表を行う（パワーポイント、板書等）。内容については教科書の内容をそのまま発表するのではなく、内容を厳選し深く掘り下げてプレゼンをする。事後処置について、発表者の自己評価はもちろんのこと、発表を聞く側も評価を行い、今後の活動に役立てる。</p> <p>目的：教師が授業を行うことに加え、グループ活動を行うことでより深く、より主体的に学習活動に向き合うことを目指す。探究活動を進めたり、発表内容について協議したりすることは、生徒同士の対話や活発な意見交換につながることを理解させる。</p> <p>反応及び効果：グループ活動を行うことで生徒はその時間を利用し、担当分野について理解を深めることができた。発表についても、内容や方法、各自の役割等事前打合せを含め主体的に関わることができた。</p>			

<技術家庭>

実施科目名	実施学年・組	実施時期・期間	実践者名
フードデザイン	高校3年（理Ⅱ選択）	11月	森戸 さゆり
<p>単元：調理と献立「ライフステージと栄養」</p> <p>内容：一生のうちで最も栄養を必要とする「青年期」、体の発育がほぼ完成し、また一人暮らしをはじめ人が多い「成人期」の栄養についての学習である。自分に必要な栄養素を摂取するために弁当箱を利用した方法を取り入れた。「3：1：2弁当法」</p> <p>目的：各世代（学童期，青年期，成人期，高齢期）に必要な栄養素量を簡単に理解できる弁当箱を使う。自分に必要な栄養素量を理解し、自分に合った弁当箱を用意して1食分の弁当を作ることが目的である。</p> <p>反応：弁当の容量＝摂取カロリーということにとっても興味を示していた。説明の後の生徒の反応は、教員が「持参した弁当箱の容量をみましょう」と言わなくても弁当箱の容量を確認する。その後は自分に必要な一日のエネルギー量は？1回分のエネルギー量はと疑問が生じてくる。1学期に学習した食事摂取基準から必要量を求める作業に移っていった。</p> <p>効果：自分に関わることを自分で調べ、生活に結びつけていくことは、家庭科の学習にとってはとても重要である。自分に必要な摂取カロリー、自分が摂取している摂取カロリーを実感できるよい機会であった。</p>			

実施科目名	実施学年・組	実施時期・期間	実践者名
技術家庭(技術分野)	中学2年 全クラス	5月, 10月	笠原 まり
<p>単元：エネルギー変換の技術「電気を作る仕組み」「社会の発展とエネルギー変換の技術」</p> <p>内容：5月「将来に向け推奨する発電方式」として社会面、環境面、経済面の各側面から発電方式について調べ、将来に向けて推奨する発電方式を決め、同じ発電方式を選んだ生徒同士でグループを組んだ。互いの情報を共有し話し合い、推奨する発電方式の仕組み、メリット・デメリット、推奨のポイントをまとめたプレゼンテーションを行った。エネルギー変換の仕組みや技能を学んだ後、10月に「2030年の日本のエネルギーミックスを考え提案しよう」として推奨する発電方式が異なるもの同士でグループを再編し、各発電方式のメリット・デメリットを考えながら、社会面、環境面、経済面などの条件において考えの折り合いをつけ、10年後のエネルギーミックスを作り出し、発表を行った。</p> <p>目的：一人一人が、互いの意見に耳を傾け異なる意見や考えを受け入れながら、社会の問題に目を向け、社会・環境・経済の側面から持続可能な社会のためのよりよい解決方法を考える。</p> <p>反応：インターネットや文献を用いて、発電方式について大変よく調べていた。高い意欲を持って話し合いを熱心に行っていた。また異なる考え方を持ったもの同士で話し合うことで、活発に自分の意見を伝えようとする姿が見えた。</p> <p>効果：話し合いって考えをまとめることで協調性のある学習を行うことができた。また、時期をあけて客観的に発電について考えられるようになり、異なる意見を持ち寄り、受容しながら、自分の意見も示していくという深い学びにつなげることができた。</p>			

<芸術>

実施科目名	実施学年・組	実施時期・期間	実践者名
音楽 I	高校1年	6月	小林 良和
<p>単元：ヴォイスアンサンブル</p> <p>内容：国民的アニメ「サザエさん」オープニング曲を題材とし、5名程度のグループ編成を行い、グループの名前やリーダーを話し合いで決める。毎時間グループの目標、学習の記録、振り返り、評価などを記入するためのワークシートを作成活用し、グループ単位での主体的な活動ができるようにした。グループごとに適宜指導を行い、生徒のモチベーションが下がらないようにしながら進めた。まとめとしての発表会を行うにあたって、プログラムを作成し、司会者、審査員を決め、審査方法を検討させるなどした。生徒個人での自己評価を行う。</p> <p>目的：一人一人が自分の役割を理解し、責任を持って取り組む姿勢を養うとともに、音楽を創りあげるための主体性や積極性を養う。</p> <p>反応：グループで取り組むことによる協調性、責任感の高まりが感じられた。さらによりよいものを創ろうと時間を重ねるごとに、集中力が高まった。</p>			

また、ワークシートにより個人、グループの課題を客観的にとらえることができたため、演奏がよりよいものになる手助けとなっていた。

効果：個々の生徒が思ったことや自分にできることを他の生徒たちと共有し、深めることができたようになった。表現に工夫を凝らし、グループの個性が明らかになってきた。

実施科目名	実施学年・組	実施時期・期間	実践者名
美術 I	高校 1 年	1 0 月～1 2 月	塩田哲夫
<p>単元：校内風景を描く</p> <p>内容：外にイーゼルを立て、そこから見える景色と向き合う。建物や樹木によって生まれる空間を感じながら、F 6 号キャンバスボードに油彩で表現する。</p> <p>目的：1 学期、石膏像を木炭でデッサンする実習をとおして、空間に対する意識が芽生えた。今度は色彩要素を加え、油絵具を用いた風景写生をとおして空間表現を学ぶ。</p> <p>反応：油絵具は乾くのに 2、3 日を要するが、一旦乾いてしまえば塗り重ねができるので上書きするように塗り重ねていくことができる。しかし油彩画を初めて経験するからか、描くことに慎重過ぎる生徒が多かった。</p> <p>効果：理想に向かって手探りで何かをつかもうとするとき、油彩画は最適の画材である。</p> <p>授業の時間内なら絵具が乾くことはないので、別の絵具を混ぜて気に入った色になるまで混色することができる。どうしてもうまくいかないときは削ることも容易である。試行錯誤のなかから自分の探しているものを見つけることができるので、目標が明確で現状を打破しようという意欲的な生徒には大きな成果があった。</p>			

<英語>

実施科目名	実施学年・組	実施時期・期間	実践者名
コミュニケーションⅢ	高校 3 年	2 月	久保田一志
<p>単元：3 年特設授業 大学入試長文問題集</p> <p>内容：</p> <p>協調学習の一手法である「知識構成ジグソー法」を活用して、学習活動の活性化をはかる授業を展開する。</p> <p>「知識構成ジグソー法」とは</p> <p>①最初に本時の問い (Task) に各自の答えを考える。</p> <p>(例) As our population grows, what do we need?</p> <p>②異なる部品 (英語の 1 パラグラフ) をグループ内で割り当てられ、同じ箇所を担当したメンバーが集まり、内容読解を行う。【ジグソー活動】</p> <p>A: food B: land C: water</p> <p>③ジグソー活動の内容を最初のグループに戻り、他のメンバーにそれぞれ説明し、内容理解を深める。【クロストーク】</p>			

④最初の Task に対する答えを再度、英文でまとめる。

As our population grows, we need …… . We also need………….

Moreover, we need………….

反応： 生徒はまず自分の既有知識から問いに取り組み、ジグソー活動においても与えられた英文読解に真剣に臨む姿がみられた。その後のクロストークではグループのメンバーに伝える責任があるので、自分の言葉で内容を再構成しながらまとめていた。

効果： 今回の対象生徒はどちらかというと英語学習に対して苦手意識を強めていった学習者であったが、自主的に英文読解にとりくむ様子からこの手法の優れた点を確認できた。実際、テーマ・教材を変えて実施したが、展開になれるに従い、質問が増えるなど学習の深まりを実感できた。テーマの選定、グループの構成等のいくつかの点を的確におさえることで効果が期待できる手法である。

実施科目名	実施学年・組	実施時期・期間	実践者名
高3 コミⅢ	高校3年	令和元年11月	鶴見紀子
単元：高3リーディング 内容： 1) 4~5人のグループを作る。 2) 英文の一段落中にある文を、一枚の紙に1文ずつ書いたカードを作り、各グループに渡す。 3) グループで話し合いながら、文を並べる。 4) 各グループの代表ができあがった文を黒板に書き、正解を考える。 目的：英文の構成に注目させる。 反応：ディスコースマーカーに注目し、文の構成を考えていた。 効果：一つの段落の英文がそれぞれどのような構成で書かれているのか理解を助けるのに役だった。			

実施科目名	実施学年・組	実施時期・期間	実践者名
英語研究	高校3年1・2組	1学期(4月～7月)	片柳哲也
単元：「同時通訳者のシャドーイング」… Lesson1 初級編(短文のシャドーイング) 内容：①比較的短い文章を使ってシャドーイングの練習を数回行なう。 ②短文を聞いた直後に日本語訳の発話を行なう。 ③同じ文章を使って同時通訳を行なう。 目的：まとまった英文を聞いて、瞬時に内容を理解できるリスニング力を養う。 反応：短い文章を用いたトレーニングでも、非常に疲れた様子だった。 生徒たちに、心地よい疲労感と同時に達成感や満足感が見られた。 効果：ディープリスニングの一技法であるシャドーイング練習により、リスニング力が飛躍的に伸びた。			

実施科目名	実施学年・組	実施時期・期間	実践者名
コミュニケーション英語Ⅱ	高校2年	10月頃 授業数3時間	川俣 海瑠

◆教科書・単元名

CROWN Lesson 4 “Crossing the border “

◆概要

このレッスンでは、「国際協力・医療」をテーマに、国境なき医師団の貫戸朋子氏の経験談を読んだ。今回は、そのレッスンの総まとめとして、計3時間を費やし、「安楽死の是非」をテーマにディベートを行った。

◆目的

教科書内容を深化させ、「自分ごと」として捉える。

◆本レッスンの内容

日本人初の国境なき医師団のメンバーとなった貫戸朋子氏は、スリランカのマドゥーに派遣された。そこでは、たくさんの患者を限られた医療機器で治療しなければならなかった。ある日、貫戸氏のもとに苦しそうに呼吸をする5歳の男の子が運び込まれる。残り1本しか酸素ボンベがない状況で、貫戸氏は「残りの酸素を少年に与えても助かる見込みは薄い。ここで使い切ってしまったら、他に酸素を必要とする患者を救えないかもしれない。」と判断し、酸素の供給を止めた。

◆ディベート内容

①準備 (2時間)

- ・生徒を4人組に分け、肯定側と否定側に分ける。
- ・4人グループの中で、constructive speaker (立論)、attack speaker (反駁)、defense speaker (再反駁)、summary speaker (総括) の役割を決める。
- ・配付したポキャプラリーシートや資料をもとに、全員で立論を考える。
- ・タブレット等を使い、インターネットで調べることも許可した。

②ゲーム (1時間)

- ・簡易版フローシートを用い、それぞれゲームを行った。
- ・生徒数は24名だったので、3試合を同時に行った。

③振り返り

- ・宿題として、「自分は安楽死を合法化すべきだと思うか」を振り返りとして書かせた。

◆反応

- ・かなり難しいテーマであるため、最初は「難しい!」「分からない!」などの声が多かった。
- ・しかし、調べていくうちに理解が深まり、立論を作る際は熱心に全員で考えていた。
- ・ディベートでは、拙いながらも一生懸命意見を伝えようとしていた。

- ・質問の際には、相手が何を言おうとしているのか理解しようとしており、コミュニケーションを図る姿勢が見られた。
 - ・振り返りシートには、「もし自分が貫戸さんの立場だったら」「もし自分の家族が患者だったら」など、様々な立場で安楽死について考えられていた。
- ◆効果
- ・準備の段階では、安楽死について自分で調べることによって、安楽死を取り巻く様々な意見に触れることができた。
 - ・ディベートによって、お互いに英語でコミュニケーションをしようとする姿勢が自然と生まれた。
 - ・教科書の内容を「自分ごと」として落とし込んで考えることができた。

実施科目名	実施学年・組	実施時期・期間	実践者名
英語	中学3年 (習熟度別：全クラス)	1月~2月(1ヶ月間)	富永 恭子
<p>単元： Lesson 7 ‘English for Me’</p> <p>内容： summarizing+Q&A(対 ALT)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科書本文 Use Read を参考にしながら、自分にとっての英語は何かについて考え、話したり書いたりする。 ・自分の考えをマッピングし、それを見ながらペアで会話、問答、コメントを行う。 ・ALT とこのテーマで話し、その後 ALT からの質問に答える。 <p>(持ち時間：1人約2分)</p> <p>目的：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・既習の文法や語いの定着を図る。 ・自分が伝えたい事柄を順序だてて英語で分かりやすく表現する。 ・即興で質問したり、それに答えたり、コメントをできる力を養う。 ・ペアワークやALT とのやり取りを通して、充実感や達成感を味わい、英語学習への意欲を高める。 <p>反応：</p> <p>今回の Performance Test が中学校最後ということで、それぞれが英語学習に対する思いをうまくまとめて伝えていた。昨年からの即興でコメントや問答をすることを継続してやってきたので、決められた時間の中で会話を継続させるために努力している様子が見られた。</p> <p>効果：</p> <p>ペアワークを繰り返し行う中で、生徒たちがマッピングに新しいアイデアを加えるなどして、豊かに表現できるようになった。生徒同士がお互いの表現や語彙を学び合い、いい刺激を与え合いながら学習ができた。また、今回の Performance Test が中学校最後ということもあり、生徒がALT との会話を楽しんだ様子が見受けられた。</p> <p>Performance Test 後に評価シートを返却することで、自分の強みと改善点を自覚できたようである。これを活用し、生徒の今後のスピーチ力やプレゼンテーション力の向上につなげたい。</p>			

実施科目名	実施学年・組	実施時期・期間	実践者名
英語	中学1年 全クラス	12～1月(2ヶ月間)	栗原 啓子
<p>単元： Lesson 8 ‘School Life in the USA’ 現在進行形</p> <p>内容： プレゼンテーション+Q&A(対ALT)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バザー会場の絵の中の人物について、名前、年齢、立場や好みなどを設定し、自由にストーリーを事前に考え、英語で書く。 <p>【条件】①現在進行形の文を使う</p> <p>②人物に名前をつけ、年齢、立場、性格、気持ち、時などを設定する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師の添削を受けた原稿を使い、毎時間の授業の帯活動として、ペアでプレゼンと質問の練習を行う。 ・ALTの前で絵を見せながらプレゼンする。プレゼン後、ALTからの質問に答える。 <p>(持ち時間：1人約1分30秒)</p> <p>目的：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現在進行形の文の定着を図る。 ・伝えたい事柄を、既習文法(be動詞、一般動詞、助動詞、現在進行形等)を使い、英語で分かりやすく表現する力を養う。 ・英語でまとまりのある文章を書くことに慣れる。 ・突然投げかけられた質問をその場で理解し、適切に応答する力を養う。 ・英語での発表やその内容に関するやり取りを通して、充実感や達成感を味わい、英語学習への意欲を高める。 <p>反応：</p> <p>今回の Interview Test は4回目で、ALTとの1対1のやり取りにも慣れてきており、ほとんどの生徒が意欲的に取り組んでいた。ALTの質問に対しても、“I’m sorry, I don’t know.” “I think he/she is ~.”などの表現を使い、柔軟に対応できていた。</p> <p>効果：</p> <p>初めは、絵の中にいる人物について条件を満たす文を述べる(書く)にとどまっていたが、ペアで練習を重ねるうちに、より生き生きとしたストーリーにするために場面設定を変え、自分で加筆修正するなど工夫する生徒が増えた。また、友達のプレゼン内容に対して簡単な質問をしたり、リアクションしたりすることができるようになってきた。</p>			

実施科目名	実施学年・組	実施時期・期間	実践者名
中学英語科	中学2年	11月～12月	高木・鶴田
<p>単元：Lesson 6 ‘My Dream’</p> <p>内容：「自分の夢についてのスピーチ」</p> <p>①3～4人の小グループで発表をする。(2分)</p>			

- ②スピーチを聞いている小グループのメンバーは、Comment/Question を行う。(1分)
- ③クラス全員の前で一人ずつ発表する。(2分)
- ④スピーチ後、教師からスピーチに関する Comment や Question を受け、即興で問答する。また、スピーチを聞いている生徒とも自由挙手で Comment/Question を受け付け、即興で問答を行う。

目的：「スピーチを元にして、即興でやり取りをする力を身に付ける」

- ①従来型のスピーチである、「作成」して、「記憶」して、「発表」するというで終わらせるのではなく、相手に伝わるようなスピーチを行った上で、即興的に Comment/Question に対応する力を身に付ける。
- ②聞き手側は、Comment/Question を行うために、しっかりとメモを取りながらスピーチを聞くことにより、より能動的な聞き方をする。

反応：

- ①スピーチを行うときだけでなく、聞いている時にも生徒は集中して取り組んでいた。
- ②メモの果たす役割が明確になり、メモを活用しながら Comment/Question する生徒が多かった。
- ③スピーチを行った生徒は、スピーチ後の質問に対して即興で答えなければならないので、スピーチの内容からより発展した内容に思考が深まっている様子が伺えた。

効果：

- ①従来型のスピーチから、即興性のあるより発展的な活動にシフトしたことにより、スピーチをする側にとっては、スピーチのわかりやすさはもちろんのこと、スピーチ内容についてより深く思考し、表現する場面が増えた。
- ②スピーチの聞き手側は、従来型であれば目的意識も低く、ただ聞き流していたような生徒も正直いたが、上記の方法に変更したことにより、スピーチを聞く目的やメモの必然性が高まり、より Listening から Speaking へ自然につながる統合的な活動にすることができた。